

プロテイノスとマイスター・エックハルト

——自己の根源への還帰——

小田川 方子

序

プロテイノス (Plotinus, 204—269) とマイスター・エックハルト (Meister Eckhart, 1260—1327) は、それぞれギリシャ的神秘思想、キリスト教的神秘思想を代表する哲学者である。両者は、直接的な影響関係をもたないにせよ、中世の新プラトン主義的伝統——とくにアウグスティヌスや偽ディオニシオス・アレオパギタなど教父哲学者たち、および『原因論』⁽¹⁾などを媒介にして深く結びついている。

両者に共通する「神秘思想」(神秘主義)とは、最高の原理ないし一切の究極的根源と自己との合一⁽²⁾を旨指すものである。それは、一般にしばしば誤解されているように、ある特殊な体験ないし異常な心身的状態に関係するのではなく、むしろ一切の偶然的

な要素を排除した上で、純粹化された本来的な人間が普遍的に経験しうるであろう新たな次元の世界、より高い現実性をもつ事実を開示するものである。プロテイノスもエックハルトもかかる高次元の世界を直接経験したことは、両者によって残された諸文献から確認することができる。

かかる神秘的経験は、最高の原理があくことなく追求されることよってのみ到達されうるが、両者においては、こうした最高の原理ないし根源への志向性は、人間に元来内在していると考えられている。そして、最高の原理との合一に至ってはじめて人間の休息を見だし、自己の完全な実現をなしとげるのである。

ところで、かかる合一への道程は、プロテイノスにおいてもエックハルトにおいても、「似たものは似たものよって知られる」

という、古代ギリシャのエンペドクレスに由来する認識の法則によって貫かれている。すなわち、最高の原理ないし根源を何らかの意味で知ることができるのは、近代西欧の認識論におけるような、固定化された主観—客観の枠組みによってではない。これによつては、客観の背後に、主観によつてはどうしても捉えることのできないある物自体が残ってしまうからである。それに対して、「似たものは似たものによつて」では、知る主体は知られるべき、ないし到達されるべき、原理に似たものとなり、自らを変革して、ないしこの原理の力によつて変革されて、ついには自らの根源にして原理である最高のものとの一体化を経験するのである。

ここで生起するのは、近代以降の人間に背負わされた運命ともいふべき「知」の人間の「生」からの乖離ではなく、知らないし思惟が、人間の生とかかわりあいつつ、生を変容させ、ついには知と生自身のもっとも根源にまで至るといふダイナミックなあり方である。以下ではその進行の過程を段階的に辿り、両神秘思想の共通性とそれぞれの独自性を明らかにしたい。

一 魂の浄化

(一) プロティノスにおいてもエックハルトにおいても、自己の根源への全過程の最初の段階は、自己にまつわる非本来的なものを取り除く「浄化」*katharsis, purgatio*の道と呼ばれるものである³⁾。その前提となるのは、人間存在のあり方についての両者の理

解である。まずプロティノスにおけるそれと、そこから必然的に帰結する浄化のあり方について考察したい。

プロティノスにおいては、われわれが日常的に生きている世界は感覚的世界であるが、それは概念的に「多なるもの」として特徴づけられる。人間は肉体を有し、肉体が感覚的世界に属しているかぎり、多なるものにつながれている。しかし他方多なるものは、それ自体で存在できるものではなく、それを超えた原理によつて支えられ、維持されていると考えられている。その原理は究極的には、「一なるもの」、「一者」*σ hen*と呼ばれ、一切の多性を排除した絶対的一性である。これは人間自身がそこから由来するところの根拠でもある。したがって人間は多なるものにつながれつつ、一者のみならずからの根源とする、中間的存在者である。

ここから、人間にとってふさわしいあり方は、「一なるもの」へと向きを変え、感覚界の影響、つまりわれわれを迷わせ、おおうところの一切の「多なるもの」を脱することである。「一切を除去せよ」*Aphate panta*⁽⁴⁾というプロティノスの有名なことばは、このことを端的に示している。

ところでここで除去されるべき感覚的な多性は、人間の自己自身にとって外的なもの——物質的なものと直接、間接に関係する有 limits、時間的な諸現象——である。これを除去するというのは、人間の心の意識的なあり方である。したがって「除去」は、人間にとって外的なものから、人間の決断による内的なものへの「転

向」epistropheである。「人は一切の外的なものを捨てて、まったく内的なものへと向きを変えねばならない」⁽⁵⁾。ここでいう「内的なもの」は、主観主義的な、ないし情緒的な内面性という意味で理解されるべきではなく、一切の外的なものの存在論的根拠として理解されるべきである。つまり、感覚的な多様なものは、意識からまったく無視されてしまうのではなく、それらの根拠としての「一なるもの」により近い、より統一的なあり方としての、「内的なもの」へと戻されるのである。

かかる外的な多性から内的なものへの意識の転向は、主体の側に即していえば、魂の自己自身への「集中化」ともいえる。つまり、魂は、「自分をいわば場所に集中させるようにして自己自身に集中させ」⁽⁷⁾、喜怒哀楽などの肉体的な諸情念から解放されて清らかになり、外的な多性からの衝撃を受けなくなるのであり、そこからさらに、自己の根底において働いているものに向かうのである⁽⁸⁾。

かかる魂の活動は、それが意識のより統一的なあり方を志すかぎり、すでに最高の原理たる「一なるもの」への類似化の方向にあるといえよう。したがって内面への転向は、万物および自己の根拠としての「一者」への還帰の第一歩であるのである。

(二) エックハルトにおける心の浄化の道は、プロティノスのそれと多くの点で共通である。まずかれは、われわれの日常的な非反省的意識、つまり通常外的な世界に向けられているわれわれの感

覚や心の動きを、いったん全面的に停止し、内面的世界へと眼を転ずることを要求する。エックハルトによれば、五官に仕え、ないし「感官のすべてと理性とを消滅的な事物に向けて」いる人は「外的な人間」であり、それに対して、外的世界に「とらわれず、自由で」*ledig und frei* あり、内面的世界をみずからの基盤として生きる人は「内的な人間」である。かかるあり方は、プロティノスにおける感覚的多性の除去と外から内への転向に対応しているといえよう。

だがエックハルトにあつては、一切に「とらわれず、自由な」あり方は、しばしば神の子イエス・キリストを規範とし、それに類似化するという意味で説かれている⁽⁹⁾。人は、イエスがとらわれなく、自由であるように、そのようにあるべきであり、われわれはかれに従うべきであり、かれはわれわれの尺度であるのである。ここから、キリスト者として絶対的な神を前にしたエックハルトにとって、一切の事物は単に「多性」という意味のみならず、被造物として「無」*Nulla* であるという意味を有することになる⁽¹¹⁾。だが「無」であるのは、感覚的世界に関係する事物のみではない。被造物のひとつとしての人間自身、それが被造物である限りにおいて、全くの「無」なのである。ここにエックハルトのキリスト者としての特徴が示されているといえよう。それは、神の絶対性に対して自覚される人間存在の底にひそむ暗さである。この人間の「無」、暗さは、エックハルトによれば人間の自我中心性に深

く根ざしており、したがって浄化のさらに進んだあり方として、「我性」*eigenschaft*を脱却し、また「自分のもの」、および「自分自身」を放棄する必要性が説かれるのである。「何らかの業において我性に少しでも縛られているならば、そのようにしてなされる業は自由を奪う。すなわち、現在のこの今、神に服し……ただ神にのみ従う自由……、どの今においても自由新たに神に従う自由、そのような自由を奪うのである」⁽¹³⁾。このように我性は、新たに神に従うという意味での心の自由を奪う自己の閉鎖性、固執性である。かかる人間の内部の否定的な面への深い洞察は、プロティノスの自己集中にみられる知的な人間理解とは対照的なものといえよう。

二 自己の変革

(一) さきにプロティノスにおける心の浄化で、すでに最高の原理たる一者への第一歩が踏みだされた。これに続く魂の発展過程では、だが、さらに直接一者へと進むのではなく、魂は一者の手前にある「知性」*hous*のところに向かうことになる。

プロティノスにおける「知性」は、絶対的な精神として、純粹な思惟活動(直知) *noesis* を行うものであり、そこにおいては思惟されるものと思惟するものとは同一である。なぜなら知性自身が思惟する主観でもあり、また思惟される客観でもあるからである。したがって知性にあつては、差異性ないし「多なるもの」は

最小限度に抑えられており、そこには「一なるもの」にもっとも近い強度の一性が存する。

では魂の歩みはこの知性とどう関係するのであろうか。さきに魂は内的なもの、つまり自己自身へと意識を転向したのであったが、いまや魂はその転向には自らの理性が働いていたことを意識するに至る。つまり多の除去および自己集中という活動が可能なのは、魂が感覚的なものを理性的の思惟の力で抽象化し、統一化するからであると意識される。かかる魂の自らの思惟活動の確認は、ついで、より強度な自己集中によって、その活動の根底においてア・プリオリに働くところの知性の確認に至る。なぜなら、もし知性がなかったならば、魂の思惟活動もありえなかったであろうからである。「たしかにわれわれは知性ではない、しかし知性はわれわれの思惟を基礎づけ、これを形成している。その限りにおいて知性はわれわれの内に入り、同時にわれわれを超えている、つまり知性は「われわれのものであり、われわれのものでない」⁽¹⁴⁾のである。

このようにわれわれは、自己認識ないし自己確認の活動において、魂の思惟の根拠としてつねに働いている知性の思惟活動を意識化するのであるが、魂の知性のなかへの前進は、魂の知性への類似化をもたらし、さらについては、魂自身が知性に「なる」ことをも可能にするのである。「魂は、もしそれが知性へと向きを変えたのであれば、知性との統一に至るのは必然である。つまり、

向きを変えた魂と知性との間に何物も介在せず、魂は知性のなかへと至りながらこれに適合し、適合することによって魂は、消滅することなしに、知性と一体になった。両者は一であり、二である。魂がそのような状態にある限り、魂は変化せず、思惟作用を営みながら同時にそれ自身の意識を有する。魂は（魂によって）思惟されたものと同一になったからである。¹⁵⁾

このように、魂は知性へと変容するが、それは、魂自身の本質性の解消をひき起こすのではなく、その昇華をたらすのである。魂の存在構造と思惟構造は、知性との一致化を通じてある別なものとなった。魂は、なるほど魂のなかに「先行的に」あるが、しかし魂自身を通じてはじめて実現されねばならなかつたところのあるもの、つまり知性、のなかへ移行したのである。¹⁶⁾それは単に理性的な意識の上での変化ではなく、同時に魂の存在、さらには魂の生命の在り方の変革をも意味する。なぜなら知性は、根源的な思惟であることよつて存在し、かつ生きているものであるからである。魂は自らの思惟の内面化の徹底によつてこの根源的な存在と生命に参入し、知性の高みにまで昇るのである。

(二) プロティノスにおけるこのような魂の知性への漸進的移行と変革にたいして、エックハルトにおける根源への道はどのようなものであろうか。それは、魂が真の神へと心を向け、自分の存在の最初の瞬間、つまり一切の被造物の「初めに」*in principio*まで立ち還ることであり、それによつて真の自己へと変容すること

である。かかる根底への還帰は「突破」*durchbruch*と呼ばれ、それはプロティノスにおける知性への道が魂の思惟の働きのよつて進行するのに対応して、意識的に、思惟の働きのよつてなされる。

しかしながらプロティノスと対照的なのは、エックハルトにおいて突破が自己の力のみによつては遂行不可能であり、かえつて自己はいったん徹底的に否定され、そこに現れる神の恩寵の働きのよつて、神の力への絶対的依存性においてのみ、自己の根源への道が開かれることである。さきですでにエックハルトにおける心の浄化として、一切の被造物のみならず、自分のもの、さらに我性からも離脱する必要があることが見られた。今や魂は神の前に自らを完全に放棄するのであるが、その時、無の深淵へと至つた魂を救い上げるのが、神の恩寵にほかならない。「魂が純粹な光のうちに入り来るとき、魂は魂の無のなかに落ちこみ、無のうちにおいて魂は、魂自身の力によつては再びその被造的なあるものに引き返すことが不可能なほどに自らの被造的なあるものから遠く離れ去る。そしてその魂の無を、神は神の非被造性をもつて底から支え、魂を神のあるものうちに保ち給うのである。すなわち、魂は敢えて無になり切つてしまつた、そして自分自身によつては再び自分自身に降り来ることではできない。それほどまでに魂が自分自身から遠く離脱したとき、そこではじめて神が魂を底から支えたまうのである。¹⁸⁾

ここで注目されるのは、二重の「あるもの」*et*が語られてい

ることである。一つは、被造物としての自己であり、「これこれ」という固有な形式と外的現実性を有するところの存在としての「あるもの」である。他の一つは、神の「あるもの」であり、魂を底から支える神的なものである。これは、キリスト教の創造説に関係づけると、神のことばによって創造された人間が、神の外へと現れ出る以前、神のことばにおいて、具体的人間の始原的原因としてあったところのものと理解されう。被造的な人間からこの始原的な真の人間へと再び帰り、それとの相等性を回復するのは、「恩寵」によつてのみ可能なのである。この恩寵はプロテイノスと異なる点であるが、しかしその基礎となる始原的原因は、プロテイノスにおける知性の思惟内容としてのイデアに相当すると考えられる。それはすべてのものの原像であり、原因であるからである。

ところで神のことばにおける真の人間は、それが神のうちにある限り、神の独り子たるイエス・キリストと等しいものである。したがって上述のことからは、人間が恩寵によつて被造的自己から神の子と等しくなることを示している。このことをよりダイナミックに表現するのが、エックハルトの好んで用いる「魂における神の子の誕生」にほかならない。ここではキリスト教の三位一体論、つまり父、子、聖霊がそれぞれのペルソナを保ちつつ一つであるという神学的な理論が、神自身の内部での関係にとどまらず、私の魂の転換をもたらす出来事として把握されている。

すなわち私は神より新しい存在を受け、神の子として誕生するとされるのであるが、それにとどまらず、さらに私が神の自己へと変容し、神の存在と生と一つになって、神の業の完全な現れとなるとされるのである。

一見大胆すぎるかあるエックハルトの思想も、かれがその前提として、私が被造的存在性を廃棄し、無に徹することを要求したことを考えれば納得できる。その時働くところの、私を神の子、神自身として生み給うという神の業は、人間の高慢さではなく、反対に神の力の偉大さを示すものであろう。「神へと至るものは、それが何であらうと変容される。……神的本性は非常に力づよいので、そのなかへと与えられるものは何であれ、完全にそのなかへと移し変えられる」⁽²⁰⁾。

このように、われわれ人間は、神のうちなる魂の根源への還帰において、神と融合し、神に通徹され、神から無限の力を得て、神の有しているのと同じ存在、同じ生をわれわれ自身のものとして、新たに生きるのである。

三 一なる根源への還帰

(一) プロテイノスにおいて、自己の根源への還帰の最後の局面は、知性から一者への移行と、一者自身との同一化として示される。一者は、究極的な始元 *arche* として、それ自身であり、多ならざるものであり、一切の多性と差異性の原理、ないし原因にして根

拠である。一者自身は絶対的な非差異性ないし単一性であり、一切のなかのいかなるものでもない。つまり一者は、厳密な意味では、それが何であるか、言い表されえないものであり、それが一切の根源ないし根拠といわれる場合でも、ただ「われわれの側から」のみ語られているのである。

さて一者は、実はすでに魂のうちで、魂には意識されずに常に作用していた。さきに見た魂の内への転向が可能だったのは、究極的にはまさにこの内的な原因に基づいている。同様に一者は、知性においても、その根底において作用している。そこで今や、知性となった魂は、自己自身のうちに働いている究極的な根拠としての一者へと向かい、自らの概念的な思维活動を超克して、自己の根底に働く一なる根源との同一化を遂行する。

この同一化は、「合一」*henosis*と呼ばれ、それ自身は思维と概念を超えた非反省的なものであるが、プロティノスにおいては、それは反省、つまり知性の思维、を前提してのみ、実現される。すなわち合一は「脱我」、つまり「自分自身からであること」*en seipsis*であり、知性の思维が自分自身を超克し、一者へと自己を放棄し、思维の「静止」*stasis*、休息にいたることである。⁽²³⁾このように合一は、思维する知性が自らに固有なもの、つまり思维を放棄して、自分を一者自身に委ねるところに実現するのであり、そこでは「かれはいわばある他者となって、かれ自身ではなく、かれのものでもなくて、……かの一者に所属するものとなった」⁽²⁴⁾

のである。

知性から一者へのこの移行は、この前の段階である魂から知性への移行が主知主義的な自己集中をつうじてなされたのに対し、自己放棄を特徴としている。段階の違いはあるとしても、結局プロティノスとエックハルトの両者に共通して、自己の否定が根源への還帰にとって不可欠なのである。しかし合一におけるかかる「自己放棄」ないし「ある他者」への変容は、自己の完全な喪失ではなく、かえって、自己の、それが本来あるべきところのものへの変身とみなされうる。つまり自己は、一者との合一において、⁽²⁵⁾いわば模倣から原像へと移行し、自己自身を完成させるのである。換言すれば、合一は、「魂の根」、つまりわれわれのうちなる根源が、絶対的根源と一つになることである。「根源によって根源が見られる、似たものが似たものと合一される」⁽²⁶⁾のである。

(二) かかるプロティノスの一者との合一に対応するのは、エックハルトにおける「神性」*gottheit*との合一 *einigung* である。神性は、さきの魂における神の子の誕生という三位一体的神の能動的な活動に対して、休息し、活動しないことを特徴とする。「神は働き、神性は働かない。神性は働くべき何ものをも有せず、神性のうちにはいかなる働きもない。……神と神性とは、働くことと働かないことによつて区別される」⁽²⁷⁾。したがってエックハルトにとって自己が三位一体的な神に還帰するのみではまだ十分ではなく、さらに神性へと「突破する」とき、自己は「内的な人間」す

ら超えて「最も内的な人間」になる。

神性は、それについては何も語られえないものである。神のことが神の子として神自身の表明であり、一切の創造の根源であったのに対して、神性は、ことを超えているのである。だが、沈黙のみがふさわしい神性が、魂にとって経験可能となるためには、神がまず神のことがにおいて、そしてそれに対応して、人間のことばにおいて、「生成し」werden、それから「還滅する」entwerden ことが必要である。生成した神がはじめて、神性へと還滅できるのである。神性はこのように、プロティノスの一者が知性の思维的働きの限界まで遂行され、ついにそれが廃棄されるところに経験されるのに平行して、神がことばにおいて現れ出て、そしてさらにそれが滅するところにあるのである。

こうしてすべてのことばを超え、静かに安らいでおり、働くことのない神性は、プロティノスの一者と同様、すべての差異性を排除するがゆえに、「一」としか言いようのないものである。神性は絶対的な非差異性のゆえに「一つの或るものであるが、それはこれでもなくあれでもない」⁽²⁹⁾。それはいかなる名も超えておりしたがって測りがたい深淵であるが、しかしわれわれおよび一切との関係でいえば、究極的な「根底」、「地盤」、「源流と源泉」⁽³⁰⁾である。

人間にとって最大の課題は、自己の究極的な根底であるかか神性に至ることである。ところで、「似たものが似たものによ

って知られる」の原則にしたがって、「一なる一」の神性に到達しうるためには、魂自身のうちに何らかのそれに類似したものがあらずである。エックハルトは、神性が「一にして単純で (ein und einvaltig) あるように、魂のなかで完全に「一にして単純で」あるもの、「一切の名を離れ、一切の形式をまともわず、あらわであり」、「一切の在り方を高く超えているもの」を、「魂のうちなる城」⁽³¹⁾とか、「魂の根底」⁽³²⁾と呼んでいる。われわれは、自らのうちなる根源である魂の城へと立ち還り、そこにおいて神の根底である神性と一つになって、永遠の安らぎを得るのである。

エックハルトにおける魂の根底と神の根底とのかかる一致は、プロティノスにおける「われわれのうちなる一者」である魂の根と一者そのものとの合一に対応する。このように両者において絶対的根源への還帰は、それへの類似化と一致化であり、同時に本来的自己の実現化であるのである。

(1) 『原因論』 Liber de causis はプロティノスの後継者フロッソスの『神学綱要』より成るものであり、一二世紀後半アラビア語からラテン語に翻訳された大きな影響を与えた。

(2) Vgl. Werner Beierwaltes, Hans Urs von Balthasar, Alois M. Haas, Grundfragen der Mystik, Einsiedeln 1974, 10.

(3) Vgl. Profini Opera, ed. P. Henry et H.-R. Schwyzer (Ehneses), III 6, 5, 13ff.; A. M. Haas, Meister Eckhart als normative Gestalt geistlichen Lebens, Einsiedeln 1979, 17, 107.

(4) V. 3, 17, 38.

- (5) VI 9, 7, 17f.
 (6) Vgl. W. Beierwaltes, Plotin. Ueber Ewigkeit und Zeit, Frankfurt a. M. 1967, 75.
 (7) I 2, 5, 6.
 (8) Vgl. VI 9, 1, 16f.
 (9) Vgl. Meister Eckhart, Die deutschen Werke (= DW), hrsg. u. uebers. v. J. Koch, Bd. 5, 109f.
 (10) Vgl. DW 1, 26.
 (11) DW 1, 69.
 (12) DW 1, 25. 土田潤照編『ドイツ神秘主義研究』東京一九八二—
 一四七—一四九參照。
 (13) DW 1, 28f.
 (14) V 3, 3, 26f.
 (15) IV 4, 2, 27f.
 (16) Vgl. W. Beierwaltes, Das Denken des Einen. Studien zur
 neuplatonischen Philosophie und ihrer Wirkungsgeschichte,
 Frankfurt a. M. 1985, 132f.
 (17) Vgl. Thomas A. Szlezak, Platon und Aristoteles in der Nis-
 lehr Plotins, Basel 1979, 120f.
 (18) DW 1, 14.
 (19) DW 1, 16.
 (20) DW 1, 109f.
 (21) DW 1, 56f.
 (22) VI 7, 32, 12f.
 (23) VI 9, 11, 23f.
 (24) VI 9, 10, 15f.
 (25) Vgl. VI 9, 11, 43f.; Das Denken des Einen, 144.
 (26) VI 9, 11, 31f.
- (27) Meister Eckhart, Deutsche Predigten und Traktate, hrsg. u.
 uebers. v. Josef Quint (= Quint), Muenchen 1979, 273.
 (28) Ebd.; Vgl. Meister Eckhart als normative Gestalt geistlichen
 Lebens, 54f.
 (29) DW 1, 44.
 (30) Quint, 273.
 (31) DW 1, 42f.
 (32) Quint, 417.
- (著) だが、ナ・マキウ、哲学・比較思想、麗沢大学教授